

『アーサー・ラザフォード氏の遅すぎる初恋 A LONG DISTANCE』

著：名倉和希

ill：逆月酒乱

♪ 角野大智

一日の仕事が終わり、大智はそろそろ帰ろうかなと私用の携帯電話を出した。着信の履歴があったので、なにげなくそこをタップして送信元の名前を確認する。

「福子さん？」

連絡先は交換しているが、ほとんど電話などかけてこない人だった。着信は午後二時。もう四時間も前になる。

外資系保険会社秘書室勤務の大智は、仕事中は会社から貸与されている携帯電話を使っており、自分のものはデスクの引き出しにしまっておくことにしている。休憩時間に手に取ることもあるが、今日はその暇がなかった。

大智は急いで帰り支度をすると、まだ工作中的の同僚たちに「お先に失礼します」と声をかけ、秘書室を出た。廊下の隅まで移動して、福子に折り返し電話をかけてみる。八回ほどコール音を鳴らしてから、そういえば世の主婦は今ごろ夕食の準備中かと気づいた。

福子は、大智の友人である坪内時広の実家の隣に住む、日暮福子という七十代半ばの主婦だ。年金暮らしの老夫婦は人がよく、坪内家の管理を頼まれている大智の要請を受けて、ときどき隣家の様子を知らせてくれるのだ。

とはいえ、坪内家に変化はほとんどなく、大智も月に一度は坪内家へ行くので、めったに電話でのやり取りはない。会ったときに立ち話をするていどだった。

十回ほど鳴らしてから、あとでかけ直そうかなと思ったとき、『もしもし？』と応答があった。聞き慣れたハスキーな女性の声は、福子だ。

「もしもし、角野です。昼間に電話をかけてくれましたよね。出られなくてすみませんでした」

『ああ、角野さん』

「忙しい時間帯にすみません。調理中なら、あとでまたかけ直しますけど」

『いいわよ、鍋は夫に頼んだから。あのね、急いで伝えておかなきゃと思って電話したの』

「隣の家になにかありましたか？」

『親戚だっていう人が、今日の昼間に訪ねてきたのよ！』

いくぶん興奮した様子の福子の言葉に、大智も驚いた。

「親戚？ 坪内家の親戚ですか？」

『そうなのよ、びっくりでしょ？ あたし、八ル江さんからそんな話を聞いたことがなかったか

ら、もう驚いちゃって』

そのときの福子の驚きが想像できて、大智はちょっと笑ってしまった。いや、笑っている場合ではない。

大智が知る限り、時広に親戚はいない。彼は幼児期に両親を事故で亡くしており、父方の祖母に引き取られたと聞いている。そのとき祖父はすでに亡くなっていて、時広の父は一人っ子だった。父方の親戚はもうみんな亡くなっているため、時広は天涯孤独の身の上だと語っていたのだ。

もしかしたら、訪ねてきたのは母方の親戚なのかもしれない。なんらかの理由で時広の母は自分の血縁と没交渉になっていて、そのまま亡くなったとしたら、時広が存在を知らなかったのも頷ける。

「その親戚という人は、どんな人物でしたか？」

『三十代後半くらいかしら、ネクタイはしていなかったけれど、服装に乱れがない、身なりがきちっとした男の人だったわよ。お隣の前をウロウロしていたから、なにか御用ですかって声をかけたの。そうしたら時広君を訪ねてきたって言うじゃないの。まっとうな大人が、平日の昼間に家にいたら、そっちの方が変じゃないかと思うんだけど、どうもその親戚は平日が休みの仕事をしているみたいで、今日しか来られなかったって言うの』

福子はよどみなく状況を語ってくれて、とてもわかりやすい。

『時広君の親しいお友達はみんな、アメリカに渡ったことは知っているのよね？』

「そうですね」

『その親戚の方はなにも知らないみたいだったの。時広君が今どこにいるのか聞かれたから、一応、仕事の関係で遠くに住んでいるとだけ答えておいたわ。それでね、手紙を預かっているのよ。どうでしょうか』

「手紙、ですか」

『ごく普通の白い封筒よ。郵便で送ろうと思ったらしいけど、一度、住まいを見てみたくて訪ねてきたんですって。留守だったら郵便受けに入れて帰るつもりだったみたい。でもお隣の家が、ただ留守にしているだけじゃなくて人氣がまったく感じられなかったから、不審に感じてウロウロしていたってことみたい。たしかに、庭なんか荒れた感じがして、窓も埃だらけだしね……。人が住んでいないってことは、なんとなくわかるもの』

福子が手紙を預かっているなら、時広の了承を得たうえで、なにが書かれているか確かめた方がいいだろう。本当の親戚なのか、それとも騙りなのか、訪ねてきた人物の正体を探ってみなければ対策が立てられない。

詐欺の一種ならば面倒だが、留守を預かった身としてはできるだけことはしたい。時広に犯罪に巻きこまれてほしくなかった。アーサーだってそう思うだろう。

「今度の土曜日にそちらに行きますから、それまで手紙を預かってもらえますか？」

『あら、来られる？ 無理なら角野さんのところへ郵便で送ろうかと思っていたんだけど』

「いや、いいです。そろそろ家の様子を見に行こうと思っていたので、行きます」

昨今の郵便事情を考えると、距離が近くとも郵便が届くのに数日かかる場合がある。行った方が早いし確実だろう。

『わかったわ。じゃあ、今度の土曜日ね』

「よろしくお願いします」

通話を切ってから、大智は時計を見て、NYとの時差を計算した。

「今向こうは何時だ？ 明け方かな。まだ夜中か？ 今年はいつまでサマータイムだっけ？」

十一月上旬までアメリカはサマータイムだ。秘書室に戻って残っている同僚に聞けばすぐに答えを教えてくれるかなと思ったが、これはあくまでも私用だ。とりあえず、大智は用件を短くまとめて時広にメールを送った。起きたあと、時間があれば返信してくるだろう。

自分の携帯電話をスーツのポケットにしまい、大智は会社を出た。

帰る先は恋人ハリーの高級マンションだ。半同棲からほぼ同棲状態になって久しい。大智が学生時代から借りているワンルームはすでにトランクルームのような状態になっており、ときおり荷物を取りに行くくらいになっていた。家賃がもったいないからとっとと解約すればいいのに、決断できていない。

ハリーはなにも言わない。もしものときのための逃げ場を確保しておきたい、大智のズルい考えなんてもうわかっているだろう。優しくて心の広い恋人は黙って見守ってくれていた。

せめてもと思い、大智はハリーのために料理をする。仕事は抜群にできて、掃除も洗濯もできるのに、ハリーは料理が苦手なのだ。身長百九十センチオーバーの健康的なマッチョでエリートだけど、完璧じゃないところに可愛げがある。

大智はマンションの最寄り駅で電車を降りると、スーパーマーケットで合挽き肉を買った。今夜はハンバーグだ。ハリーはその体格から容易に想像できるとおり肉食で、好物はステーキ。もちろんハリーのために美味しい肉を買ってきて焼くことはあるけれど、大智はよくハンバーグを作った。たくさん作っておいて、それぞれが好きなだけ食べればいい。量を調節できるところが便利だからだ。

高給取りのハリーは賃料が高めのマンションに住んでいる。ファミリータイプなので広いだけでなくキッチンが充実していて、大智はそこも気に入っていた。スーツを脱いでワイシャツの袖をまくり上げ、デニム地のエプロンをつける。玉葱を刻み、肉だねをこねているところにハリーが帰宅した。

「お帰りなさい、ハリー」

「タダイマ」

ぬっと姿を現したシロクマ——もといハリーが、大智の手元を覗きこんで笑みを浮かべた。

「ハンバーグ？」

「そうだよ。あとは焼くだけだから、着替えてきて」

「OK」

プラチンブロンドに碧眼のハリーは、ハリウッドのアクション俳優のようにカッコいい。日本支社に赴任した当初は、女性社員にキャーキャー言われたものだ。けれどゲイだとカミングアウト

して、大智と付き合いはじめたらもうだれも告白してこなくなった。当然、大智もゲイだと知れ渡った。生粋のゲイではなく、男と恋愛関係になったのはハリーがはじめてだけれど、ハリーを愛してしまったのだからもうゲイでいい。

両親にはカミングアウトしていないが、妹には知られている。妹の美琴はハリーを気に入り、大智を応援してくれていた。

ハリーはというと、十代のころに家族にカミングアウトしたらしい。それ以降、弟との仲は悪いという。そんな話を聞くと、どこまで自分に正直に生きればいいのか、両親に打ち明けるべきかどうか迷いが生ずる。

けれどそういう迷いも苦しみも、パートナーと分かちあっていきたいと思う。今のところ、大智はハリーと別れるつもりはまったくなかった。

丸めた肉だねをフライパンに並べて焼きはじめると、スーツを脱いだハリーがキッチンに入ってきた。とたんに狭く感じるほど、ハリーは体格がいい。

「皿を出しておくよ」

「ありがとう」

料理はできないけれど、ハリーはそれ以外のことはとてもよく気がついて、率先してやってくれる。フライパンに蓋をして蒸し焼きにしているあいだに、大智は手早く味噌汁を作った。具は大根と油揚げ。作り置きのお茄子の煮浸しも冷蔵庫から出す。大智の動きを見て、ハリーがお椀や小鉢を食器棚から出してくれた。本当に有能だ。

焼き上がったハンバーグにたっぷりのケチャップを添えて、夕食がはじまった。

二人で雑談をしながらの食事は楽しい。ハリーとの会話はすべて英語だ。簡単な挨拶でいどしか、ハリーは日本語ができない。大智は時広の親戚が見つかったかもしれないという話をした。ハリーは口の中のものをゆっくりと咀嚼して、飲みこんだあとに意見を口にした。

「トキにそれを知らせたら、とても喜ぶだろうね。彼は天涯孤独な身の上だと思っていたわけだから。けれど、実際にトキに会わせる前に、その訪ねてきた人物があやしくないかどうか君が見極めた方がいいと思う。トキは親戚と聞いただけで、無条件に信じてしまいそうだ。もし詐欺の類이었다ら、トキが傷つく」

そうだよね、と安堵する。大智が抱いていた心配と一致したからだ。

「じゃあ、時広のOKがもらえたら明後日の土曜日に福子さんのところまで手紙を受け取りに行くよ」

「もし、トキの親戚と会うことになったら、私もついていくからね」

「えっ、ハリーが？」

「ダメなのか？」

目を丸くした大智に、ハリーがはっきりと不服そうな表情をする。

「もし危ない奴なら、ダイチだって危険じゃないか。ボディガードとしてついていく」

ハリーにとって大智は守ってあげなければならないお姫様なのだ。今までも言葉の端々にそういう表現をしてきたハリーだ。大智はたしかにハリーより小柄だが、これでも身長は成人男性の平

均はあるし、時広のように細くもない。おまけにもう三十歳だ。格闘技の経験があるわけではないので、腕に覚えはないけれど。

難しい顔で黙々とハンバーグを食べているハリーに、大智は微笑みかけた。

「ありがとう。じゃあ、そのときはよろしくね」

パアッと表情を明るくして、ハリーが碧い目を輝かせる。

「任せてくれ」

ニコニコしながらハンバーグを頬張るシロクマ。彼ももう三十五歳だ。それでも可愛いなと思ってしまうのは、たぶん惚れているから。

「片付けは私がやるから、ダイチはトキと電話しておいで」

そう言われて、大智は携帯電話を手にハリーの書斎へ行った。ハリーの体格に合わせたサイズの大きいデスクとチェアが置いてある。デスクトップパソコンの暗証番号は、もちろん知らない。ハリーが大智に明かしていないビジネスとプライベートに、無断で踏みこむつもりはなかった。大きなチェアに座り、自分の携帯電話をタップする。会社から送ったメールには、『あとで電話してもいい?』という返事が来ていた。NYの現在時刻を調べたら、午前八時頃。ちょうどいいかもしれない。

電話をしてみると、待っていたのか時広はすぐに応答した。

『僕の親戚を名乗る人が来たって本当?』

挨拶もそこそこに時広は興奮した様子で聞いてくる。きっと目を輝かせて頬を紅潮させているのだろう。時広の表情が想像できて、大智は苦笑した。

「本当だ。今日、福子さんから電話があった。メールにも書いたけど、手紙を預かってきている。明後日の土曜日に受け取りに行く予定だけど、俺が開封して写真を撮って送ろうか? 郵便でそっちに送ると時間がかかるし」

『そうだな、そうしてもらえると助かる』

「わかった。じゃあ、明後日の今くらいの時間に送るよ」

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<https://www.fwinc.jp/daria/>